

# 第24回京都市地域リハビリテーション交流セミナー

## 報告書

# ハーネスは心のきずな ～盲導犬とともに～



- 日時 平成23年2月10日（木） 午後2時から4時  
場所 京都市身体障害者リハビリテーションセンター  
主催 京都市地域リハビリテーション協議会  
京都市（身体障害者リハビリテーションセンター）  
後援 社団法人京都府医師会 社団法人京都市身体障害者団体連合会  
公益財団法人京都新聞社会福祉事業団 NHK 京都放送局  
KBS 京都 J:COM 京都みやびじょん 京都市教育委員会  
協力 公益財団法人関西盲導犬協会

## ～はじめに～

京都市地域リハビリテーション交流セミナーは、医療、福祉のみならず、様々な角度から地域におけるリハビリテーションの推進を図るため、市民の皆さんに御参加いただき、障害のあるなしにかかわらず、地域で豊かに生活できる環境づくりについて、考えていただくことを目的として開催しています。昭和62年度に第1回目を開催して以降、今年度で第24回目となります。

今回は、視覚に障害のある方のパートナーとして活躍している盲導犬に焦点をあて、関西盲導犬協会の久保ますみ様にその訓練実演の様子を、また、福嶋慎一様には盲導犬ユーザーとしてのお話を伺いました。御両名におかれましては、お忙しい中、御協力いただき厚く御礼申し上げます。

当日は、朱雀第七小学校4年生の皆さんも含め、約130名の方に御参加いただきました。皆さんからは、盲導犬や視覚障害者の方への理解が深まったという感想が多く寄せられ、障害者にとってやさしいまち、相互に支え合い安心して暮らせるまちにするために何が必要なのか、考えていただく機会を提供することができました。

今後も、地域リハビリテーション推進事業の取組への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

地域リハビリテーション推進担当

---

## 目 次

プロフィール	1
開会挨拶	2
第1部	
関西盲導犬協会	
久保ますみさんによる訓練実演等	3
ビデオ上映	
第2部	
盲導犬ユーザー 福嶋慎一さんのお話	10
会場との交流	15
閉会挨拶	18
アンケートから	19
小学生感想文から	20

## ～プロフィール～

公益財団法人 関西盲導犬協会

1980年11月、盲導犬の育成普及を願う市民が集まり発足。

1983年7月、京都府の許可を受け財団法人を設立。同年8月、国家公安委員会から「盲導犬を訓練し認定する団体」に指定されました。

1988年4月、京都府亀岡市に盲導犬総合訓練センターを開設。

1991年5月には天皇皇后両陛下のご視察、2004年3月には当協会を舞台にした映画「クイール」が公開され、話題になりました。

2010年9月、内閣府の許可を受け公益財団法人に移行。これまでにのべ317人の視覚障がい者に盲導犬を無償で貸与してきました。しかし、協会運営費のうち行政からの補助金は10%ほど。質の高い盲導犬を育成するために多くの皆さまからのご支援をお願いしています。

福嶋慎一氏

1933年、京都府生まれ。

1974年3月、大阪市立盲学校を卒業後、京都府南丹市内の自宅に鍼灸治療院を開業。自営業の傍ら、京都府視覚障害者協会会長・京都身体障害者相談員・京都府身体障害者団体連合会副会長・日本盲人会連合理事など、さまざまな障害者団体の役員を歴任。

1994年には京都府知事表彰、2001年京都新聞福祉賞、2007年旭日双光章を受賞。

1983年、関西盲導犬協会として初めて行った第1期共同訓練を修了。以後、28年間、常に盲導犬と共に生活されてきました。現在、福嶋さんのパートナーである4頭目の盲導犬ルカは、2007年秋の叙勲の際、皇居宮殿に初めて入った盲導犬としても話題になりました。



**司会**：ただいまから、第24回京都市地域リハビリテーション交流セミナーを開催いたします。

本日はお寒い中、御参加いただきましてありがとうございます。本日、司会を務めさせていただきます、身体障害者リハビリテーションセンターの中西と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

### ～開会挨拶～

**司会**：それでは、まず主催者を代表いたしまして、京都市地域リハビリテーション協議会会長の上原春男から、御挨拶申し上げます。

**上原会長**：皆さんこんにちは。(こんにちは)

本当に寒い日になりましたけれども、たくさんの方々にご参加いただきまして本当にありがとうございます。また、朱雀第七小学校のみんな、今日は御苦労様。ありがとうございます。

京都市地域リハビリテーション協議会とは、どんなことをしている会かと申しますと、一つは障害を持たれた方々はどうしても家に閉じこもる方が多いんですね。なるべくそういう方々に外へ出て行く機会を作っていたらこうということで、いろんな生活リハのことをやっております。

もう一つ、今日このような交流セミナーなどの取組をしております。

残念ながらわが国では、まだまだ障害を持った人に対する理解度が少ないんですね。ですから、なるべく健康な人と障害の方と交流していただいて、少しでも健康な人々に障害を持たれた方々へ御理解をいただきたいと思っております。

小学生のみんなも、毎日普通に暮らしている時に、障害を持った人がいると思って生活してないでしょうか？ たとえば、みんなが自転車でどこかへ行って、歩道でボンと自転車を置いて、そのままどこかへ行ったりする。健康な人にとって、それは避けて歩けば何でもないことなただけけれども、視覚障害のある方、あるいは車いすの方にとっては、とても危険であったり、通れなくなったりします。ですから、健康な人に常に少しでもそういうことを理解しながら生活していただきたいという目的でこういった交流セミナーなどを続けております。

今日は、ここに書いてありますように、「ハーネスは心のきずな～盲導犬とともに～」ということで、視覚に障害のある方のパートナーとして暮らしている盲導犬というものに焦点をあててみました。そのことを通じて、障害のある方々にとって、やさしいまちづくりにはどんなことをしたらよいか、今我々は何ができるのか、一緒に考えてもらえればと思います。また、こういう機会を通じて社会福祉等に理解を深めていただければと思います。

どうぞ最後まで、しっかり見てしっかり聴いて、いろんな感想、感じたことを、多くの人に、ぜひ輪を広げていただくことをお願いいたしまして、開会の御挨拶とします。

今日は、本当に寒い中ありがとうございます。

## 第1部

### ～訓練実演等～

司会：それでは、今回のセミナーは「ハーネスは心のきずな～盲導犬とともに～」をテーマとして始めていきたいと思います。

第1部は、関西盲導犬協会の久保すみさんに盲導犬の訓練実演をしていただきます。

久保さんは、視覚障害者生活訓練指導員を経て、関西盲導犬協会の盲導犬訓練センターに勤務され、現在主に学校での講演や実演活動などに取り組んでおられます。

それでは久保さん、御登場ください。

久保さん：皆さんこんにちは。(こんにちは)

今、御紹介いただきました関西盲導犬協会と申しまして、京都市のお隣り、亀岡市に訓練センターがありまして、そこから参りました久保と申します。そして、私の足元にいますのが、ラブラドル・リトリバーという種類で、名前をダッシュと言います。「スタートダッシュ」のダッシュで、男の子です。このダッシュ君と二人で、今から盲導犬について、どんな作業をするのかな、あるいはそれをどうやって教えていくのかな、というところをお話させていただきたいと思います。

ただ、盲導犬がどんなお仕事をするのかということの説明するには、まず、盲導犬を使う方、目の不自由な方って、道を歩いていて何に困るのか、見えないってどんなことなのか、その辺りのこともぜひ知っていただかないと、盲導犬が何をするのが、なかなかわかりにくいかなと思います。

そこで実演をする前に少し、目が不自由ということはどんなことかという話をさせていただきたいと思います。

今、非常に大雑把な数でいうと、日本に視覚障害といわれる方は、大体40万人ぐらいといわれています。厚生労働省では、30万数千人という数が出ていますが、こちらの方で、都道府県別に視覚障害者の数ということで調べて合計すると、38万人ぐらいになります。この障害者の数というのは、身体障害者手帳という手帳をお持ちの方です。でも、身体障害者手帳を持っていないけれど、目が不自由な方という方も恐らくおられるわけです。眼科の医師がそういった方を把握しておられ、眼科の先生にお話を聞くと、そういう人は2万人ぐらいおられるのではないかとおっしゃるので、ざっくりとしたら40万人というのが、一つの目安になる数かなと思います。

「目」というのは周りの様子を知るのに非常に便利な感覚ですね。「百聞は一見に如かず」なんていう言葉があります。どんなに百の言葉をつくして説明するより、1回見ただけの方がよっぽど早いとよくいわれます。そういうふうに考えますと、今この会場に、どうでしょう、どれぐらいの数の方が来られているでしょうか。100人近い方がおられるでしょうか。それで、皆さんどんな様子で、どんなふうに座っておられて、というのを私たちは口には出さないけれど、互いに目で見て、何となく確認しています。今日は小学生の子どもさんがあそこいっぱいいるなとか、年配の方がおられるなとか、いろいろとわかるわけです。ところが、残念ながら、この会場の様子を共有できない、できていない方が若干1名

おられるわけです。というのは、後で御登場いただく福嶋さん。盲導犬を使っておられる方ですけれども、今ここにどんな人がいるのだろう、というのを福嶋さんにも説明をしないと、一緒にこの会場の雰囲気味わうことができない。じゃ今からそれを説明しましょうという、ものすごい時間がかかりますね。どんなふうに列が並んでいて、どんな方がいて、何人いて、どんな服装して、車いすに乗っている方がおられて、杖を持っておられる方がいて……。一つ一つ説明していると、それだけで4時ぐらいになってしまいます。

そこで、少し簡単ですけれども、お話を聴くだけでなく、身体を動かして、会場の様子をまずみんなで共有してからお話をしていきたいと思います。

ということで、会場の皆さんにちょっと御協力いただきたいわけですけれども、声に出して「はい」というのは、ちょっと恥ずかしいです。ここで「はい」と、多分なかなか声が出ないと思います。そこでまず、今から「こういう条件の方」とおたずねしてみます。この条件に当てはまる方は、手をたたいていただくか、手をたたけない方は、声を出していただくか、手も声も無理ならちょっと足をならしていただくか、してください。どんな感じで座っておられるのか、お互いに確認したいと思います。

まず、手っ取り早く、小学生の方、1、2の3と言ったら、手をたたいてください。1、2の3。(パラパラと拍手) ちょっと恥ずかしいなと言って、手をたたかないと、それだけで人数が少なくなってしまう。もう一回、1、2の3、はい。(今度はま

まった拍手)

今度、60歳以上の方、いきましょう。60歳以上の方、1、2の3。(拍手) こんな感じでばらばらとおられますね。

そうしたら、小学校は卒業したけれども、まだ10代ですという方、おられるでしょうか。1、2の3。(拍手) お一人おられるようですね。

では、今まで一度も手をたたいたことのない方。つまり、20、30、40、50歳代の方ということになります。今まで一度も手をたたいてない方、1、2の3。(拍手) 多いですね。

女性の方、いきましょう、1、2の3。(拍手)

男性の方、1、2の3。(拍手) 大体同じくらいですか？ ちょっと男性の方の元気がなくて、女性の方が多く思えてしまいます。

こんな感じで、今軽く手をたたいていただきました。もちろん、これだけですっかり、福嶋さんにすべてを伝えきったわけではないです。でも、こんな感じで座っておられるんだな、ということ、私もわかって、福嶋さんにもわかって、ちょっと想像していただきながらお話をさせていただくと、誰がどんな状態かわからないまま、話すよりは話しやすいかと思います。

言ってみればこんなふうに、目が不自由、目が見えない、目が見えにくい、いろんないい方をしますけれども、まず、目が見えなくて、何ができないか。この後の福嶋さんのお話にあるかもしれません。目が見えなくて、まず歩くのに不便です。文字を書いたり読んだりするのが不便です。でも、もう一つ忘れられがちなのは、こういう誰

もが何となくわかっている当たり前の情報が、当たり前には持っていない。周りの様子をきちっと知ることが難しい。こういうのを「情報障害」といういい方をしたりします。こんなことも目が不自由で困ることの一つに挙げられるのではないかと思います。

こんなふうに、周りの様子がわからない、つかめないために、つまりは歩くことがちょっと不便ということになります。

先ほど目の不自由な方が40万人おられると言いましたけれども、よく目の不自由な方というと、皆さん、全く見えない方をイメージされる方が多いかと思います。もちろん全く見えない方もおられるんですが、見えにくい状態という方のほうが実は数が多かったです。全く見えないわけではない、でも皆さんみたいにはっきりものが見えるわけではない。見えにくいという状態を「弱視」という言い方をしたりします。「弱視の方は、ちょっと見えているから、全く見えない人より楽よね・・・。」

果たしてそうでしょうか？ 弱視の方は、全く見えない方に比べると、一番必要としている援助が受けにくかったりする、そんな不便さがあつたりします。全く見えない人は、何に困っているのか、どういうことをお手伝いしたらいいのか、想像しやすいですけれども、弱視の方は何が見えているのか、何ができにくいのか、そんなことがなかなか周りの人がパッと把握するのが難しく、損をしてしまつたり、いやな思いをしてしまつたりします。

時々こんな話を聞きます。白い杖を持っている人が、パーっとまっすぐ歩いて行った。目が見えているみたいに白杖を持って

歩いている人がいる。ここに白杖を持ってくるんですけど、(白杖を出して)盲導犬と同じように目の不自由な方が使う道具です。これを使ってパーっと歩いている方がいた。この様子を見られた方の中には、「いやあ、見えない人って勘がいいね」「見えないのに杖でパーっとぶつからずに歩いている」そう思う方もおられると思います。弱視の方が杖を使って歩くことがあります。ちょっと見えているのに杖なんているのでしょうか。ぼやけて周りが見えにくい、何となくぼんやりとしか見えないので、なんかここに白いものがあるんだけど、なんだかよくわからないから近づいて行ったらつまずいてしまった。細かいものは見えるんだけど、見える範囲がものすごく狭いので、「あそこに時計があるわ、今2時15分だわ」と時計ばかり見ていると、ここの足元が全然見えてなくて、ぶつかってしまった、なんていう失敗があつたり、歩きにくさがあつたりします。だから、全く見えない方もそうですけれど、弱視の方も安全に歩こうと思ったら、こういった杖というものが必要になります。(白杖で歩いて)杖を使って、振って歩くことで、「あ、なんかぶつかるものがあるわ」、「またぶつかるものがあるわ」、「こっちはぶつからずに歩けるわ」といったことであるとか。ここに階段を置いていただいています、「この階段どれくらいの高さかな」すごく高い段なのに、小さな段だと思って足を上げるとつまずいてしまいますね。逆に、小さな段なのに大きな段だと思って、足を出したら怖いですよ、空踏みするみたいに。杖を使って「どれくらいの高さかな」、(杖を階段に当てて確認して)杖を当てながら行ってい

ると、(階段を上がって)「階段が終わった」、  
「ここからまた下り階段が始まるな」(階段  
を下りて)「これで階段が始まって終わる」  
なんて、確認がとれたりするわけです。

こういった確認が必要なのは、全く見え  
ない方だけでなく、弱視の方でもこういう  
確認が必要だということになります。

この杖が教えてくれること、ここに障害  
物があるよ、ここから階段が始まるよ、こ  
ういったことを犬にさせて、どんなふうに  
歩けるか、というようなことで盲導犬とい  
うのが訓練されました。今みたいなスタ  
イルで訓練されたのは、第1次世界大戦中、  
ドイツでのことだと言われています。ドイ  
ツで神経ガスといった毒ガス兵器が、第1  
次世界大戦で非常に多く使われたそうです。  
結局、その毒ガス兵器で兵隊さんの目が見  
えなくなって、犬に訓練をして歩けるよう  
にならないか、ということで訓練されるよ  
うになった、これが盲導犬の今のようなス  
タイルの始まりだと言われています。

いつから訓練するかと言いますと、犬が  
1歳になってからです。じゃあ、犬が1歳  
になるまでは、どうしているかと言うと、  
1歳になるまでは訓練はしません。訓練は  
しませんが、盲導犬になるための別の勉強  
をします。どんな勉強か。人間と一緒に暮  
らすという勉強をします。お話の後で、ビ  
デオを見ていただくかと思っていますが、  
そのビデオの中にも出てきます。最初は、  
生まれたばかりのちっちゃな子は、2箇月  
までの間、お母さんと一緒に暮らして、お  
母さんのおっぱいを飲んで、丈夫な身体を  
つくります。2箇月ぐらいになって犬の体  
重も3kg・4kgになってくる、とパピーウ  
ォーカーといわれるボランティアさんのお

うちに預けて、そこで、1歳になるまでの  
10箇月間を過ごします。その10箇月間  
の中で、人間にいっぱい愛情をかけて育て  
てもらふことで、犬は人間と一緒に暮らす  
ということを経験します。そして「人間と  
一緒にいたら安心していいんだなあ」「人間  
と一緒にいたら何も心配しなくていいんだ  
なあ」と思ってくれるだけ、愛情をかけて  
育てる、そういうことをします。

ダッシュ君も1歳になるまではパピーウ  
ォーカーさんのおうちで、大事に大事に育  
てられてきました(ダッシュのハーネスを  
はずしながら)。だから人間が大好きです。  
知らない人でも、やさしいまなざしを向け  
られるとそれだけで、お仕事を忘れてしま  
うぐらい、人間に関わることが好きです。  
大事に大事に育てられました。

さあ、そして1歳になると、訓練センタ  
ーに帰ってきて、そこから訓練を始めます。

訓練を始めるには、ハーネスという盲導  
犬が身体につける道具、はずしましたけれ  
ど、まず、訓練センターに帰ってきてから、  
「今から訓練します、ハーネスつけますよ」  
ではないんです。最初は何をするかという  
と、人間の勉強と同じなんですけれど、犬  
もやる気を持ってくれないと困るわけです。  
やる気のない人に一生懸命訓練しても、全  
然頭の中に入れてくれないですよ。犬も  
やる気が大事、「よし訓練を受けよう」とい  
う気持ちを持つことが大事です。人間だっ  
たら、お小遣いをあげるとか、おやつがも  
らえるとかで、ちょっと勉強しようかなと  
いう人もいるかもしれませんが、犬にお小  
遣いをあげるといっても犬は喜んでくれま  
せん。そこでまず何をするか。犬が好きな  
ことをします。じゃあ犬は何が好きかと言



うと、そこは普通の犬と同じですから、遊ぶことが大好きです。ボールを持ってきました。(ボールを出して) こんなテニスボールを使って遊ぶことが大好きです。もちろんボールだけでなく、他の遊びも好きな犬もいますけど、(ボールをころがす)「OK, カム (Come)」(ダッシュがボールをくわえて持ってくる)「グッド (Good)」

今、遠慮がちで、(ダッシュがボールを落とす、ころがっていく)「取ってきてよ、ダッシュ君。取ってきて」(ダッシュがボールをくわえてまた持ってくる)「はいはい、グッド、グッド」というような感じです。今はこんな状態ですけれど、勢いよく投げたりするとワーッと走ってくれます。

とにかくこんなふうに物で遊んだり、追いかけてこしたり、犬が好きな遊びっているいろいろありますけれど、まずは、よく遊べます。よく遊べば犬はもっと遊びたいですから、「次この人、どうやって遊んでくれるかな」「このボールいつ投げしてくれるかな」一生懸命ボールの方を見て、人間の言うことを一生懸命聞こうとする、一生懸命人間の動作を見ようとする、というようなことをします。(ボールで誘うようにすると、ダッシュがついてくる) そうやって、犬が人間の方に注意を向けてくれたら、そこから少しずつ訓練をしていくということになります。

「ダッシュ、シット (Sit)」(ダッシュ、座る)

今、お昼寝の後で、ちょっと寝ぼけている様子ですけれど、ボールを一生懸命見ているときにこのボールを上を持ち上げてあげます。一生懸命遊んでいるときにボールが上に上がると、当然犬はボールを目で追

います。顔を上に向けます。顔が上に向くと座りやすくなります。自然に座るという形をとるわけですね。そうしたらそこに「シット」と声をかけてあげます。「座りなさい」という命令をかけます。

「OK, カム」(歩き出すとダッシュ、ついてくる)

たとえば、「今日は犬に座ることを教えるぞ。まずは形から入りましょう」と、無理やりお尻を押さえ付けたり、どうでしょう。人間でも無理やり「ここ座りなさいよ」と肩を押さえられたらいやですよ。犬に座りなさいと身体を押し付けたり、犬も人間のそばで身体を押さえ付けられていやなことが起きるということを覚えてしまうと、人間の言うことなんか聞きたくないですね。

そこでまず、ボールで遊んでいるときに「OK, シット」と座らせて、うまく座れたら「グッド」

「ダッシュ君、シット」(ダッシュ、座る)「グッド」またボールで遊んであげる。また遊ぶ。こんなやりとりをして、人間の言うことを聞いたら何かいいことがあるなということを教えていく。そうやって人間の言うことを一生懸命聞こう、聞いたらいいことがある、また遊んでくれる、またほめてくれる、こんなことを覚えていって 少しずつ訓練を受けたいなという気持ちを持ってもらいます。

そこで「OK, ダッシュ君」。こうやってほめてほしいな、という訓練を続けて、ダッシュの前にハーネスを持ってきたら(ダッシュ、ハーネスを付ける)、自分でポッと身体を入れるわけです。なんでこんなことするかというと、ハーネスを付けたら楽しいという訓練を徹底するからなんです。盲

導犬になったら、毎日ハーネスを付けて出かけるわけですから、これ付けてしんどいなんて思ったら、毎日苦痛でしょうね。「これ付けたらしんどいよ」じゃなくて、「これ付けたら楽しいよ」という訓練を多くしていくわけです。もちろん、ハーネスを付けているときは、さっきと違ってボールでは遊びませんが、代わりによくほめるということをする。うまくいくと「グッド」いっぱいほめてもらえる、ハーネスをつけたら楽しいよ、いっぱいほめてもらえる、やる気が出る。

「ゴー (Go)」(ダッシュと歩き始める)

そして何をするか。杖と同じように、まずぶつかりそうなものがあつたら、そこに障害物があることを目の不自由な方に伝えます。

「OK, カム」(ダッシュと一緒に歩く)

「OK, ストレートゴー (Straight go)」  
まっすぐ行ってコーンをよけていきます。

「ストレート, ゴー, OK, ゴー」(次のコーンの前で止まる)「どうする?そしたらどうする?」(またコーンをよけていく)「OK, グッド」

まずはよけて行こうということをしします。(コーンをよけて、会場の座席の間を歩く)このままよけて皆さんの中にずんずん入っていく。なぜかというとコーンとコーンの間が少し狭いから、道が向こうに続いているよ、ということで歩いて行きます。必ず左側通行をしていきます。左側通行をして、今何をしているかといいますと、左に身体を向けて止まっています。ここで「左に行きなさい」という指示をすると、またこの通路を左に曲がる。道が出てきますので、また左に身体を向けて止まっています。「O

K, レフトゴー (Left go)。左に行きなさい」という指示をしします。そして、皆さんの列の横を歩いて行って、ここをまた左に曲がる角が出てきたよ。「OK, レフトゴー」と、コーンのところで止まります。(会場の1ブロックを一周し終える)

それをよけて左へ行って、そしてまた小学生の前を通過して「OK」止まる。「OK, レフトゴー」(会場の小学生の座席ブロックを一周し終える)

ぶつかりそうなものをよけながら、左側に寄って歩くという、犬の動きを見ていただきました。

もちろん盲導犬を使うのは、目の不自由な方ですから、犬が右を向いた、左を向いた、今よけた、という犬の動きは目ではわからないですよ。その代わりにこのハーネスという道具、ハンドルを持っています。これによって、犬が今右に向いているな、止まったな、と犬の動きが目の不自由な方に伝わるわけです。盲導犬は、ハーネスというこの道具を必ず身体につけます。ハーネスは、行先を指示する道具ではなく、犬の動きを知るための道具です。このハーネスのハンドルを持って、犬の動きがわかるということは、階段でも、この階段の段差がどれぐらいかということ判断するのに、このハーネスがとても大事な役割をしします。「OK, ゴーカーブ (Go curb)。段差のあるところを行ってね」という指示があると、(ダッシュ, 1段目に足をかける)前足を上にかけて止まるということをしします。このハーネスのハンドルを持っていると、犬が高い所に足をかけて止まったな、ということがわかるわけです。そこで人間が、自分の足で確かめて、「OK, ゴー」進むよ

うに指示を出します。下りるときも手前で一度止まります。ここから下りる段が始まりますよということをそれで伝えてくれます。「OK, ゴー」(階段を下りる)ハーネスのハンドルを持っていれば、一段先を行く犬の動きから、どれぐらいの高さの段を上がるんだろう、どれぐらいの高さの段を下りるんだろう、そしてどこで階段が終わるのだろう、ということがわかっていくわけですね。これもほめて教えていきます。

ダッシュ君も最初から階段を見たらきちんと止まっていたわけではありません。最初はそんなことはわからない。じゃそれをどうやって教えるかということ、最初は、「ゴー、カーブ、階段があったら止まってね。」と人間が止めてしまいます。答えを教えてあげます。答えを教えてあげた後に「グッド、利口だね」とほめてあげるわけです。これをもう何十回となく繰り返します。犬が最初のうちは何もわからなくても、やがて段のところで止まったら「人間がほめてくれるな」ということを覚えてきます。それを覚えていけば、犬はほめてもらうのが大好きですから、「あそこで止まってほめてもらったんだったら、ここでも止まったらほめてくれる」、「あそこでもまた止まったらほめてもらう」。自分から仕事をしてくれるようになります。こうやって盲導犬の作業を、怒られないためにするのではなく、ほめられたいから一生懸命自分からやるよ、という気持ちを持って、訓練を進めていくようにしていきます。そして、訓練は大体1歳から1年間かけて行っていきます。

ただ、「グッド、グッド」とほめるのが大事ですとお話したんですけれども、犬の中には「グッド、グッド」と人間にほめられ

るよりは、よその犬と遊んでいる方が楽しいわ、ほめられてるんだけど、なんかちょっと・・・、そういう性格の犬もいます。そういう犬はどうするかというと、それをどうやって克服するかではなくて、克服するのはリハビリテーションですが、犬の訓練は、どう克服するかではなくて、そういう子は盲導犬には向かないと判断します。盲導犬には向かないと判断した犬は、盲導犬にはせず、代わりに普通のおうちのペットとして、かわいがってくださる御家庭にお譲りしています。もし皆さんの中でも、「あー私も盲導犬になれなかった犬をおうちで飼ってみたいな」と思っている方がおられましたら、ぜひ関西盲導犬協会まで申し込んでいただければうれしいなと思います。ただ、限りなく盲導犬に近い盲導犬になれなかった子をイメージされる方も多いかもしれませんが、盲導犬に向かない子ですから、限りなく盲導犬には向かないと判断されたやんちゃな子もいますので、そのあたりはぜひ御承知のうえ申し込んでいただければうれしいです。

犬の訓練の話をしてきましたが、犬を訓練してすぐ、目の不自由な方にお渡しできるわけではないです。この白い杖でもそうです。身体障害者手帳を持つと、福祉事務所から「目が不自由になったら白い杖ね、はいどうぞ」と渡されただけで、杖を使って歩くことはできない。杖を使って安全に歩くためには、歩行訓練を受けることが必要かと思います。犬も同じです。訓練した犬を「はいどうぞ」と渡す前に、この犬の主人になる目の不自由な方にも訓練を受けていただきます。これを共同訓練といいます。4週間かけます。盲導犬と安全に歩く

ためには、目の不自由な方にも勉強してもらわなければいけないわけです。それから、安全に歩くことだけではなくて、犬のお世話、生きていますから食べ物も食べます。食べたら出すものもあります。そして、盲導犬は、いろんなところに出かけるわけです。レストラン、デパート、ホテル、飛行機に乗って海外へという方もおられます。この子たちが、そういったところでマナーを守って、清潔に健康にいられるように必要なお世話、これも全部、この犬の主人になる目の不自由な方にしてもらいます。なので、その練習もします。

今、日本には約1,100人、盲導犬を使っている方がおられます。この1,100人の方は、全国に10ある盲導犬の育成団体のどこかで必ずこの共同訓練を修了しています。訓練の様子、あるいは町を歩いている様子、こういったところは、私の説明だけでは、なかなかわかりにくいと思いますので、この後、実際の様子をビデオで見てくださいと思います。ビデオは、日本に10ある盲導犬育成団体のうち、8つの団体が加盟している全国盲導犬施設連合会というのがありますが、その連合会に加盟している施設を一つ一つ取材して、8つの協会の様子をそれぞれ少しずつ取り入れて編集していますので、協会によってやり方、考え方が違ったりします。ですから、ビデオの中では、お話した内容とちょっと違う説明があるかと思います。そこは、関西盲導犬協会と違いがあると思っていただければと思います。今からその様子を見ていただき、その後休憩をはさんで、次のプログラムに続いていくかと思います。

盲導犬をどんなふうに訓練して、どんな

様子なのかなということをお紹介して、私の話を終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

NPO 法人全国盲導犬施設連合会製作ビデオ「知ってください！ もっと盲導犬のこと」上映

## 第2部

### ～盲導犬ユーザーのお話～

司会：第2部は、盲導犬ユーザーの方のお話です。本日は福嶋慎一さんにお越しいただきました。

福嶋さんは、関西盲導犬協会の第1期共同訓練修了者で、以来28年間、盲導犬とともに生活されておられます。まさに「ハーネスを心のきずな」として、日々過ごしておられるユーザーとしてのお話をお聞きいただきます。

それでは福嶋さんよろしくお願ひします。

福嶋さん：皆さんこんにちは(こんにちは)。御紹介いただきました福嶋です。もう何しろ80歳に後2年ということで、78歳になっています。盲導犬は50歳のときに使用し始め、28年間になります。私は、目が見えなくなったのが、ちょうど今から40年前なんですけど、38歳の時でございました。目が見えないとは一体どういうことなのか。先ほどもお話がありましたが、少し私の方で、まとめてみたいと思います。

人間の感覚とか、人間が生活するには、手足、そして五感といわれている目、耳、鼻、味覚、触覚を総じて、何か情報を見つ

けて、それを使いながら生活していきます。皆さんは生まれながらにして、目が見えることに慣れていて、物の形、色、そして物によっては重さ、距離感の関係、すべて目で感受していることはおわかりだと思いますが、さて、目が見えなくなってみると、果たしてこういうことが私たちにとっていかに大切であったかと思わざるを得ないわけです。というのは、本当に空気のように常に歩くのが当たり前とっておりましたので、目が見えないことは一体どういうことなのか、不安なことが多くございます。

目が見えないというのは、大きくは二つの困難があります。

一つは、情報の提供がない、情報が入ってこないということです。入ってくるのは、耳だけ、あるいは触って感じられる範囲ということになります。そして、移動の自由がありません。目が見えれば、どこへでも行けるんだけど行けないということで、移動の困難さというのがあります。この二つの大きな要素が、障害を持つゆえに起こってきます。

私は、公務員でございましたので、見えなくなって、一番先に退職せざるを得なくなりました。職業がなくなり、収入が途絶えとなると、本当にどうやって次の職業を選択していくのか、ということをいろいろ考えました。もし目が見えてなかったら、どういうことができるか。商売の関係も、全部知っている範囲で、「この商売だったらどうだろうか」、お金は別として、「お金があったらこういう商売ができるだろうか」と考えるときに、目が見えなくても商売が一人でできると思えることは、ほとんど皆無に等しかったです。

私には、当時8歳と6歳になる娘が二人おりました。じっとしているわけにはいかないので、その悩みがありました。間髪を入れず何とかしなければならんということで、考えた末、結局、視覚障害になった以上、目の見えない人は、あん摩マッサージ、はり、きゅう、こういうお仕事に就いて生活されていることを承知しておりましたので、そこへ勉強に行けばしばらくしたら何とかなるだろうと、簡単に思っていました。

ところが、それも3年間勉強して、習得した後に試験を受けて免許がもらえるということ。それなら京都では盲学校、というふうになりまして、そこへ行きましたが、年齢が行き過ぎていると拒否されました。そして京都ライトハウスにお世話になって、大阪の市立盲学校へ行きました。3年間寄宿舎生活をしながら勉強して、技術と知識を身につけて、卒業したら41歳になりましたので、勤めることも困難だと思って、自分の家で自営のはり、きゅう、あん摩マッサージの営業を開始しました。

目が見えなくなって、家庭の中でのことはほぼ経験がありますので、何とかできます。ところが、形のあるものは触ってわかりますが、色のついたもの、靴下が左と右を間違ったりということがあります。私には幸い家族がありましたので、家族の援助を得ながら、だんだんと慣れ、洗濯物を取り入れるときには、きちっとまとめて自分の手触りの感覚で確かめるなど、いろいろなことを考えながら生活してきました。そういうことで生活における困難はほとんどありませんでした。けれども、さっき言いましたように外出するということになり

ますと、もう一歩前が障害物です。車は通っている、道路に物が置いてある。自転車、ごみ箱、駐車、それから第一、道がわからない。私は、失明した38歳の時には、まだ少し目が見えておりましたが、昭和53年ですから43歳ぐらいになって、全く見えなくなってきました。そうこうしているうちに、歩行訓練を受けるようになりました。京都ライトハウスの訓練士に私の方に訪問していただいて、大体1時間半ほどかけて、週に2回、約1年近くかけて歩く訓練をしていただいて、単独で白い杖を持ちながら歩くことができるようになりました。そして、仕事の方は何とかになりましたので、家でやりながらしていたのですが、文字が読めなくなりました。盲学校にいたときは、弱視の立場で、普通の字を拡大しながら見ておりましたが、もう43歳で字が見えなくなった。仕事をしながらだと、訓練には行けない。どうやって点字をマスターしようかな、ということで、点字の本を2冊買って、一行目にどういうことが書いてあるということ、テープに録音していただいて、それを繰り返し繰り返し、指先で触って、点字を取得しました。教えてもらってやればよかったのですが、毎日お仕事がありますので、仕事の合間だけ、あるいは夜だけというような形でした。

ところが、点字はブツブツした文字を指の爪の裏側、「腹」って言いますね、やわらかいところで触れて、ブツブツした点の状態によって読んでいくということになりますので、触っているとジーンと指がしびれてくる。初めは何が何かわからない。それを繰り返しやっているうちに何とか、点と点が離れていること、上下があるというこ

ともわかってきて、どうにかこうにか、五十音を読めるようになったのは3箇月後ぐらいでしょうか。

本に沿って進んでいきますと、同じ点字を使いながら、数字が、外来語・英語が、あるいは記号や符号があるというのを少しずつ習得していったんですけど、何しろ50歳近い45歳の状態でしたので、なかなか速度は出ません。いまだに速度は出ないんですが、点字しかもう読めない状態です。点字の本というのは、京都ではほとんど出版しているところが少ないです。普通の本は、読むことができません。本屋さんに行っても点字の本を置いてある店はどこにもありません。情報は極めて少ないのです。今日、いろんな情報社会と言われて、毎日毎日のように新聞折り込みに入っている広告、そして雑誌、本、あふれるように印刷物が出ておりますけれども、どこに行っても点字の本は売っていないとか、手軽に自分の思う文字が取得できるような状態ではございません。それでもテープレコーダーとかによって、音声によりまして書物を読むことができました。それが最近はまだ、電子図書というCD版になって聞けるようになりまして、更に、パソコンによって、文字が音声に変換されるというふうになってまいりました。私もそういう情報を得るために、73歳になって、京都ライトハウスで週2回、1年半かかってパソコンの勉強に寄せていただいて、どうにかパソコンを使って、図書館で作られている点字の図書を有意義にすることができております。

いろんな情報をインターネットを通じて取り入れるようになりましたが、情報入手は本当にそういう点ではありがたい分もあ

るんです。ただ、いろんな人の目が、音声だけに頼っていたのが、最近は、それに色をつけたり、たとえば私は使ってないんですが、そのパソコンでも、指で触ってクルクルと回して、その部分を拡大してみる、ダウンロードしていく、とかいうのができるようになったりして、本当に視覚障害者がついていけるのか、ということが、しばしばあります。もちろん、洗濯機や炊飯器とかの電気製品、すべての機械が全部、ブツと指で触るか触らないかで、タッチできるようなシステムになりましたので、われわれなんか触って、すぐそのボタンを押せるという状態ではありません。それだけに情報がさらにバリアをたくさんつくって、訓練しても訓練してもその上に新しい機能がついてくる、情報提供については困っている部分もあります。

それから、後の一つの移動の自由なんです。視覚障害者は、先ほどお話がありましたように単独歩行、一人で歩けるかどうか。これは、白い杖を持ってどこへでも、電車に乗って、飛行機に乗って、タクシー乗って、バスに乗っていろんなところに行けるように訓練をすればある程度できるようになります。これも1年ぐらいきちっとした訓練を受ければできるんですけども、訓練を受けない人は、全く今のモータリゼーションの中では、車社会の中では困難です。

そして、もう一つの歩行の方法として「手引き」というのがあります。これは、一人では歩けないけれど、手を引いてもらえばどこへでも行けるというメリットがあります。しかし、相手の人をさがさなければなりません。そして、相手の人都合を聞いて

て事前に調整する期間が必要になります。今は公的に援助される「ガイドヘルパー制度」というのがありますが、これも登録をして、いつ、どういうところへ行って、いつ頃に帰りたいから、ヘルパーさんを派遣してくださいというお願いをしてOKが出て初めて使えます。今日急に、お天気がいいからどこか散歩に、ハイキングに行きたいなと思っても、すぐに使えるものではありませんので、そういう難点があります。また、公的な補助の中にありますものの、それなりに制限もございます。時間制限をしているところ、あるいは金銭的に自己負担をしていくところ、悪評となりました障害者自立支援法の中の自己負担分1割というのがかかってきますと、ヘルパーさんを仮に1日10時間使ったとすれば、恐らく2,000円ぐらいでしょうか、お金を自分が出さなければならない。それを1箇月の間、何回使えるかということで、何とか安いお金で、どこへでも行けるようにしてほしい、制限も撤廃してほしいという要望を常にされておられます。

そしてもう一つの方法が、盲導犬ということに私の場合はなります。先ほど久保さんからのお話にありましたように約1,100人近くの方が全国で盲導犬を使って歩いています。京都では約20頭、まだまだ低い。京都に11,000人の視覚障害者がおられるというふうに行政の報告がされております。先ほどいったように全国では40万人、京都では11,000人、その視覚障害者の中で、重度の目の見えない障害者でヘルパーさんが必要な人が2~3割おられるとすると、少なくとも2~3,000人は必要になってくる。その中で盲導犬の必要

な数がたった20頭で足りるでしょうか。とても足りるような状態ではありませんけれども、今それぐらいの数しか盲導犬が作られていない。待っている人がたくさんいますと承っています。そこで盲導犬を私が取得したのが1983年、今から28年前です。それまでは、7年間ぐらい白杖歩行をしておりました。

盲導犬を使えると3つの特典があります。一つは「スピード (Speed)」。風をきって歩くような速さ、いわゆる時速4km近くの早さで歩きます。そして、「セーフティ (Safety)」。安全である。私たちは、一步一步、足先だけ杖で探って歩くよりも、盲導犬の目を借りて、早く正確に歩ける。そして、もう一つは「スマート (Smart)」。 「スピード」、「セーフティ」、「スマート」。3つのSで盲導犬が使える、本当に助かっています。

同時に、犬は生き物です。血が流れております。ぬくもりがある、心のいやしを与えてくれます。確かに、一日の食事もありますから、排せつもする。外へ出るから、きれいにシャンプーしなければならない、ブラッシングしてやらなければならない。もちろんえさ代はある、薬代はある、予防注射など、いろんな費用はかかりますけれど、いつでも私の好きなときに「どこどこに行ってくれるか」という感じで出しますと、盲導犬は喜んで仕事をしてくれます。

3年半前、平成19年、私が秋の勲章をいただきましたとき、皇居へ、天皇陛下に拝謁に行かなければならない、盲導犬を連れて行かせてほしい、ということで、いろいろ問題はあったようですが、京都府の方もきばっていただき、厚生労働省の方も初

めて入る盲導犬だから何とか頑張っていた、宮内庁と接触しながら、この盲導犬を中に入れていただくことができました。

先ほど話がありましたように2002年に「補助犬法」といって、盲導犬や聴導犬、介助犬が、社会に出かけて行って、お役に立てる。施設などにそういう犬が来たら、何とか断らないで中に入れてくださいよというお願いに基づいて法律ができましたが、まだまだ徹底されていません。まだまだ、個人のところでは断られることが多いわけです。よく盲導犬を連れていくと、盲導犬といえども入ってもらっては困りますと、拒否される場所もありますが、ほとんど多く私たちは入れるようになってきたことは事実です。これはみなさんの理解のおかげだと思っています。

私たちは盲導犬だけを使っておりますが、盲導犬を連れていくからどこでも安心だということにはまだまだなりません。自分で全部命令しなければなりませんので、なかなか分からないときがたくさんあります。視覚障害者が立ち止まったとき、うろうろしていたら、「何かお手伝いすることがありますか」といってお手伝いをしていただけたらうれしいです。口で多分説明していただければ足りること、たくさんあると思います。皆さんの善意によって、いかに多くの視覚障害者が外出先で安心できるか。一緒に電車に乗るときでも「ここが入口ですよ」というふうにちょっと声をかけていただいたら、「今、渡れますよ」と声をかけていただいたら、大変私たちにとってありがたいと思います。皆さんにアドバイスをしていただいたら、いっそう、盲導犬を連れていく人も、白い杖を持っている人も助かる



思います。

声をかけることは勇気がいることですが、皆さんのお力によって、安心な外出ができますように、御協力いただけたら、大変ありがたいなと思います。

大変まとまりにくいお話を申し上げましたけれど、これをもって私の話を終わります。

本日はありがとうございました。(拍手)

司会：ありがとうございました。

## ～交流～

司会：これからの時間は、久保さんにも加わっていただいて、会場から盲導犬に関する御質問や、日頃思っていることなど、出していただき、「障害を持った人にとってやさしいまち」にしていくために、私たちにできることは何かを考えていきたいと思えます。

会場：ユーザーさんはどのように盲導犬にえさをあげているのですか

福嶋さん：ドッグフードを与えておりますが、1食大体120gぐらい計測をして、器が決まっておりますので、それにお水かお湯、500ccと一緒に、朝1回、夕方1回と2回与えております。

会場：もし、地震が起きたときはどうするんですか？

福嶋さん：地震が起きたときですか？ 犬も私と同じ部屋にいますので、おそらく外へ逃げなければならぬときには、多分私が先に逃げて、犬の入口を開けてやらなければならぬと思います。でも、地震の

揺れが収まるまで動かない方がいいかなと思います。もし、そういうようなことが起これば、自分が出て、それから犬を出すことになると思います。

会場：盲導犬をしつけるときに大変なことではないですか？

久保さん：ほめてしつけてあげたいので、その犬がどんなことをしたら喜んでくれるのか、犬の1頭1頭の性格を見極めて、それに合った方法を見つけるというのが、一番難しいと思います。

会場：私は、ガイドヘルパーとして活動させていただいて現在12年目となります。私もガイドをしながら思うのですが、ワンちゃんの背の高さですと、不意に背の高い旗とか障害物が出てきたときに、わかりにくいと思います。どういうふうにしつけておられるのか、お答えいただけでしょうか。お願いします。

久保さん：まず、訓練のときは、上にあるものに気をつけるようにという訓練はしていきます。たとえば木の枝であるとか、ぶつかりそうなところにさしかかったら、いったん人間が止まって、どういったところに気をつけなきゃいけないか。たとえば木の枝だったら触って音をたててゆすったり、上の方にも気をつけなさいよと注意を促していきます。何回か繰り返していくと、犬も視線を上げるようになります。そのときに「グッド、気をつけたらいいんだよ」ということで、注意を向けるように訓練をしていきます。

訓練士の背の高さとユーザーの背の高さがすごく違った場合もあります。そのために、4週間の共同訓練、盲導犬を持つため

に目の不自由な方にも受けてもらうのですが、この4週間は、目の不自由の方が訓練を受けるといった意味合いもありますが、犬が、訓練士から目の不自由な方を御主人として切り替えていく、そういう期間なのです。これはよける、これはよけなくても大丈夫、と教えています。ただ、あんまり上の方ばかりに注意を向けて、肝心な目の前のものを見落としたりいけないので、そこは歩ける範囲で見逃すということもあります。ガイドヘルパーをされているということですが、犬が人間を誘導するというのは、たとえば、私たち人間がキリンを誘導しているようなものです。皆さんもキリンを手引きしながら「キリンの首、大丈夫かな」想像したらキリンを誘導するのは難しいだろうなと思われると思います。そういったところでは、パーフェクトにできるのではなく、多少の失敗もあるので、皆さん、歩いているときは、「盲導犬がいるからよけるよね」とよける様子を見るのではなく、「上の方に障害物がありますよ」と声をかけていただければうれしいなと思います。

**福嶋さん**：私の場合、28年間、4頭目の犬を使っています。ほとんど毎日外出していますから、洗濯物とか干してあって顔に触れるというときは、止まります。なんで止まったのかなと思って、手を前に出すと洗濯物があるとかね。それぐらい気をつけています。

左右差もそうです。自転車が置いてある狭いところを、犬と一緒に歩いているときパッと止まる。なぜ止まったのかな、とスッと手を前に出すと、自転車のハンドルがちょっとこっちを向いていた。また、後ろから来た人にスッと追い抜かれたときも、

「え？ 触ると思ったら触らんと行ったわ」というぐらい、ちゃんと間隔を見られています。すごいと思います。

**会場**：ガイドヘルパーになりたての頃、とても感動したことがあるんですけども、目の不自由な方が、盲導犬がテーブルの下にいたのですが、犬のしっぽを踏んでいかれたのに、ワンともキャンとも声を出さずにじっと耐えていたのを見て、ワンちゃんも、自分がここでほえたらいけない、というのがわかっているんだなと、感動しました。そういうことも教育として教えられているんでしょうか？

**久保さん**：せっかく感動していただいたのに、それをぶち壊すようで非常に申し訳ないのですが、犬は「ここで私は耐えなければ」といって耐えるというよりは、おそらく目の不自由な方も、踏んだという感触はあると思います。踏んだとわかりながら、ギュッと踏みつけるのではなく、踏んだと思ったらスッと力を抜くと思うんです。ですから、犬たちにとって「踏まれて痛い、だけど我慢しよう」というよりは、そんなに痛みはないと思います。もし本当に痛かったら悲鳴は上げます。私たちでも痛かったら反射的に声が出ますよね。そういう時に、悲鳴を上げないように訓練する、我慢しなさい、ではなく、それは恐らく人間の方が力を抜いているはずで、犬たちは痛いときには痛いと言うと思います。人間のために一生懸命お仕事してくれる犬たちですから、逆にユーザーさんが、目の不自由な方も、犬のことを気遣ってくださっているの、そういうこと多分されてなかったのだと思います。申し訳ありません。

**会場**：排便はどうしていますか

**福嶋さん**：排便は1日2回ぐらいで、やる時は袋をつけてさせます。おしっこの時も同じですが、3回ぐらいは少なくともします。外出したときは、それ以上に気をつけています。袋をつけて、排便処理をして、袋だけ汚物入れに入れて処理しております。

**会場**：なぜ、「ひも」ではなくて「ハーネス」なんですか？

**福嶋さん**：ハーネスでないと、ハンドルが柔らかいと角度がわかりません。階段を少し上がるようなかっこうのときは、ひもではわかりません。ハーネスだとそのまま手に感じますので、これは上を向いたなとか、下りていく時は下を向きますからわかります。左右もわかります。そういう意味では、ハーネスがいちばんいい方法だと思っています。

**会場**：盲導犬になれる犬は、何種類ぐらいいるのですか？

**久保さん**：日本ではラブラドル・リトリバー、あるいはゴールデン・リトリバー、また、ラブラドルとゴールデンとの雑種がよく使われています。中でもラブラドル・リトリバーが一番多いです。ただ、外国ではもうちょっといろいろな種類が盲導犬をしています。じゃあ、どういった犬が盲導犬になるかということ、一つはラブラドル・リトリバーぐらいの大きさがあるということ。小さいと向かないので、それぐらいの大きさがあって、盲導犬としての素質、落ち着いて、いろんなところで行動できて、非常に穏やかな性格の犬たち

であれば、盲導犬にすることができると思っています。

実は、そういった性格の犬が生まれるように、お父さん、お母さんを選んでいきます。外国では、いろんな種類の犬たちがいますが、日本では、盲導犬になるための子犬を生んでくれるお父さん犬、お母さん犬のほとんどがラブラドル・リトリバーなんです。それで日本では、この種類がいちばん盲導犬として多いという状況になっています。

**会場**：盲導犬ではなく、雑種を飼っているのですが、排せつのときが大変です。盲導犬は知らせてくれるのですか？

**福嶋さん**：排せつは、時間を決めて、こちらが誘導します。今日は水をたくさん飲ませたから2時間ぐらい後に1回させておこうとか、ずいぶんたまっただろうとか、緊張して冷たい所に長く座らせていたな、というときは、ちょっと早めにさせます。失敗したことはないです。

また、ドッグフードを規則正しく同じ量を与えていますので、毎日同じ量の排便をします。袋に取りますから、硬さも自分の手で触って、やわらかさ、量を見て、今日一日分出たなと常感じて、健康管理を含めてします。飼い犬の場合は、残飯をやったり、おつゆかけをしたり、多いなとか、少ないなとか、辛いなとか言いながらやられているようですけれど、量が決まっていますので、そういう点では、管理はしやすいです。

**司会**：それでは、時間となりましたので、今日はどうもありがとうございました。まだまだ質問したいことがあったとは、思い

ますが、申し訳ありません。

## ～閉会挨拶～

**司会**：最後に閉会に当たりまして京都市地域リハビリテーション副会長の加藤から御挨拶申し上げます。

**加藤副会長**：皆さん、本日は長時間にわたりまして、この「ハーネスは心のきずな」というテーマでのセミナーに御参加いただきまして、本当にありがとうございました。

そして、大切なことをたくさんたくさん教えていただきました、久保様、そして福嶋様、改めましてありがとうございました。

(拍手)

小学生の皆さんもたくさん質問してくれました。とても一生懸命聴いてくださって感謝いたしております。

この「リハビリテーション」という言葉ですが、「リ」というのはもう一回という意味があります。「ハビリス」というのは、人としてふさわしい、という意味があります。人として輝く、ふさわしく生きるということが「ハビリス」であります。この「リハビリテーション」というのは、もちろん狭い意味で考えるのではなく、社会全体で考えていくべきものであります。ですから、久保様、福嶋様のお話にあったように、視覚障害のある方を見受けられたときに、「何かお手伝いいたしましょうか」というふうに、勇気をもって声をかけること、最初はなかなか難しいですけれども、一度声かけてしまうと癖になってしまいます。そういったことが大事だと思います。つまり、リハビリテーションが本当の意味で必要なの

は、私たちの心や私たちの社会ではないかなという思いがいたします。知らん顔するような、一人一人が無視するような、そういう社会が広がっていくことが一番怖いことです。

今日は、改めて盲導犬というものの大切さ、そしてその役割から、リハビリテーションを学ばせてもらいました。

すべての人、障害のある人、障害のない人、本当の意味で、ともに学び、ともに生きていけるように、社会を、まちをつくっていきたいものであります。

その思いを分かちあうことをもって、本日の閉会の御挨拶に代えたいと思います。

本日は大変ありがとうございました。

**司会**：以上をもちまして、第24回京都市地域リハビリテーション交流セミナーを終了いたします。本日はどうもありがとうございました。気をつけてお帰りください。

## ～アンケートから～

当日御参加いただきました市民の皆さんにアンケートの御記入をお願いし、感想や御意見を伺いましたので、抜粋して掲載します。

- ・普段、盲導犬を見たりしないので、身近で見られて改めて知ることができた。(10歳代・女性)
- ・盲導犬が一緒でも、判断が困難な場所があること。声かけがあれば、ベストなことがわかった。また、京都に盲導犬協会があっても、活動している盲導犬が少ないことに驚いた。(40歳代・女性)
- ・実際に犬を使って実演していただき、そのあとでビデオを観て、大変わかりやすかった。質問も具体的でよく理解できた。(50歳代・女性)
- ・訓練士の方とユーザーの方のお話がいろいろ聴け、とてもよかった。子どもたちがたくさん熱心に聴き、質問していたことにも感動。主催者の挨拶も改めて胸にしみた。(60歳代・女性)
- ・実際の訓練の様子など、普段見ることのできないところが見られ、大変よかった。(20歳代・男性)
- ・ユーザーの方の苦労なされた話を聞いて、交流をもてたことがよかった。もし、道で出会って、気づいて、できることがあれば声かけしたいと思った。勉強になった。(40歳代・女性)
- ・両氏のお話は、とてもわかりやすかった。視覚障害の方への声かけを勇気を持って行うことができそうだ。(50歳代・女性)
- ・初めて参加した。やさしくも厳しい愛情を持って育て上げる、お互いに寄り添うことの大切さがよくわかった。慣れてきた時に別れが待っているのはつらい。身体の中の部分が悪くても動き(日常生活)に支障をきたす。目の不自由な方用の道路案内板があるが、欠けている物や浮き上がっている物もあり、気になる。(60歳代・女性)
- ・犬に対して人情が移るから、厳しさがあって、育てる難しさがわかる。(70歳代・男性)
- ・昔、携わった「しのぶの明日」という映画を懐かしく思い起こした。(60歳代・男性)
- ・犬と人とのつながりを感じた。(40歳代・男性)
- ・学べることが多くあったので、大変よかった。(20歳代・女性)
- ・訓練士は、単に訓練犬を送り出すだけでなく、ユーザーにも指導を行うなどの仕事があり、また、その必要性があることも知ることができてよかった。(20歳代・男性)
- ・ユーザーの方も犬の世話をしておられるそうで、大変なことだと聞いている。機会があれば、その方面のお話も聞かせてほしいと思う。(70歳代・女性)
- ・子どもたちと一緒に聴講するのも楽しい。視覚障害者のホーム転落事故の原因、点字ブロックの重要性、ホームと電車の隙間や段差を意識した安全対策など、といった内容を希望する。(40歳代・女性)

## ～小学生の皆さんの感想文から～

当日は、朱雀第七小学校4年生の皆さんも参加していただきました。視覚障害について学習をされたばかりということで、熱心に聴いておられました。以下、寄せられた感想文の中から、掲載させていただきます。(原文のまま)

・わたしがリハビリテーションに行きって思ったことは、目が見えないということは、私が思った以上に不便だということです。ハーネスで犬の動きが分かるということにびっくりしました。全国で目が見えない人や、盲導犬を使用していた人が思った以上に多かったです。私は、目が見えなくなったり、盲導犬とふれあったりしたことがないのでそういう体験をしてみたいです。

・リハビリセンターで、勉強した、もうどう犬は、かしこい犬だと分かった。

くんれんを、見せてもらったときに、ぼくは、階だんのときに、どうするのか、分からなかったけど、前足を前に出すと分かった。

しつもんタイムのときに、ぼくは、しつもんでできなかったけど、いっぱい話をしてくれはったのでよかったです。

町で歩いているときに目の不自由な人がいたらたすけてあげたいと思いました。

・わたしはリハビリセンターへ見学に行きって、もうどう犬はユーザーさんの指じをととてもよくきくので、かしこいなと思い、びっくりしました。もうどう犬がかしこくなるのは、ちゃんと指じにしたがったら、訓練しさんやユーザーさんがかわいがってほめるからだと思います。だからもうどう犬は人間のことを信らいして人間の指じをきき、もうどう犬になっていくと思います。

・2月10日に、リハビリテーションセンターに、行きました。もうどう犬は、日本で、たくさん使われていることが、分かりました。

わたしは、もうどう犬ユーザーに会ったら、思いきって声をかけてみたいです。

もうどう犬のくんれんは、とても大変だと思いました。パピーウォーカーの家庭から、訓練センターに戻って来るとき、1年間いっしょにいた、パピーウォーカーの家庭は、すごくかなしいんだろうなと思いました。

・最初、盲導犬を見た時は、大きくてかわいかったです。しつけをするには、長い間くん練しなかったらいけないから盲導犬はすごいなと思いました。使う人もくん練して、やっと使えるので、大変ですごいと思いました。盲導犬はかいだんやしょうがい物があるとよけるのがすごくかしこいんだなと思いました。盲導犬もすきなことをしてからくん練するのを初めて知りました。

・2月10日木曜日、リハビリテーションセンターに行きました。盲導犬について、教えてもらいました。盲導犬の種類は、ラブラドルレトリバーでした。

盲導犬の訓練は、人間の勉強だそうです。

犬をほめてあげる時は、グッドとほめてあげるそうです。ぼくの目が不自由になったりしたら、盲導犬に、グッドと言ってほめてあげたいと思います。盲導犬は、目の不自由な人のためによくがんばっているんだなぁと思いました。

・わたしはリハビリセンターでもうどう犬のはなしをきいてユーザーさんは、いろいろなくろうをしたんだなぁと思いました。もうどう犬も、くんれんしてユーザーさんも、くんれんをしないといけないとはじめてしりました。とてもびっくりしました。これから、もうどう犬もはいるお店がふえたらいいなぁと思いました。もうどう犬のことがたくさんしれてよかったです。

・もうどう犬のことをいろいろしれて楽しかったです。

なぜひもじゃなくてハーネスなのかがすごく工夫しているんだなぁと思いました。

もうどう犬になれなかった犬がひきとられるのを初めてしりました。

ユーザーさんも、初めは心配だけど、しばらくするとなれるのだと思います。

もうどう犬のくんれんをするのは大変そうだと思います。

・ぼくのクラスは今日、「ハーネスは心のきずな」と言う行事に参加して来ました。それには、二ひきのもうどう犬が来ていました。ぼくの予想とちがってもうどう犬は大きくてとてもかしこそうでした。行事にはお母さんも来ていました。くんれん士さんの話を聞いてぼくはもうどう犬がとてもかしこいと思いました。犬が人をつれて歩けるなんてすごいと思いました。これからもうどう犬を見たら使っている人を助けてあげたいと思います。

・目の不自由な人達はとても苦勞をして生きているんだなぁと思い、目を悪くすると、人生が変わってしまうんだということが分かりました。またもうどう犬がとてもかしこいのは、たいへんなくん練をして強くなったんだということを知りました。パピーウォーカーズという人たちに私はいっかいなってみたいです。

リハビリセンターに行けてとてもよかったですと思いました。

・ぼくは、今日、リハビリテーションに行き、色々なことをしりました。一番おどろいたのは、犬のせいかくで、もうどう犬になれるか、なれないかをきめるということです。ぼくは、うまれた犬をぜんぶ、しけんをさせて、合かくとふごうかくをきめるのだと思っていました。ほかにも、もうどう犬は、小さい時、人間の家族といっしょにくらすということも、はじめてしりました。

第24回京都市地域リハビリテーション交流セミナー報告書  
平成23年3月発行

編集発行 京都市身体障害者リハビリテーションセンター  
京都市地域リハビリテーション協議会  
住 所 〒604-8854  
京都市中京区壬生仙念町30  
電 話 (075) 823-1666